（城西人文研究第15巻第１号）

Faerie Queene, Book I における「光」と「闇」

古　川　啓　二

序

Spenser 畢生の大作 *Faerie Queene* はついにその完成を見ることはなかった。我々に残されているのは，第６巻までと *Mutabilitie Cantos* として知られている第７巻目の断片だけである[1]。幸い Spenser は Sir Walter Raleigh に書簡を残しており，我々はこの書簡から *Faerie Queene* の概要を知ることが出来る。Spenser は創作方法について次のように述べている：

> .....this booke of mine, which I haue entituled the Faerie Queene, being a continued Allegory, or darke conceit, ...

さらにこの作品の目的，その意図についてこう続けている：

> The generall end therefore of all the booke is to fashion a gentleman or noble person in vertuous and gentle discipline : .....[2]

Spenser はこの書簡の中で，Aristotle の徳目を柱とした紳士のあるべき姿，

1）当初は12巻まで書く予定であったらしい。
2）*Spenser : Faerie Queene,* ed. by J. C. Smith (London : Oxford Univ. Press, 1909), vol. II, p. 485。以後引用は全て vol. I と vol. II による。

その理想像を表現しようとしたと Sir Walter Raleigh に語っている。Book I では Redcrosse Knight と Vna が，悪を体現している Dragon 退治を行ない，捕えられていた Vna の両親が無事救い出され，Redcrosse Knight と Vna が結ばれるという筋が展開されている。批評家は，多分 Spenser が使っている 'darke conceit' の 'darke'[3] という言葉の不明確性からか，*Faerie Queene* に出てくる登場人物や描かれている出来事を倫理的，心理的あるいは歴史的，政治的アレゴリーとして分析し 'darke conceit' の解釈を行っている[4]。そこから得られる恩恵は読者にとって量り知れぬものであろう。

しかしながらその論点の眉先は Allegory の示す抽象観念に向けられており，その具象性は言及されてはいるものの周辺におかれている。確かに Hankins は *Source and Meaning in Spenser's Allegory* (Oxford, 1971) の中で The Allegorical Landscape (pp. 55—98) という一章をもうけて Castles, Forests, Caves, Waters という具象物について論じているが，Tasso の *Gerusalemme Liberata,* Ariosto の *Orlando Furioso,* Ovid の *Metamorphoses,* Dante の *Divine Comedy,* Virgil の *Aeneid* からの影響として述べられており，具象物そのものの解釈とは言い難いようである。本来 Allegory とは，抽象観念を具象化して表現する文学形式である。従って必ず具象化が行なわれており，読者がまず目にするのは具象物そのものであり，特に *Faerie Queene* において少なからず読者の心を捕えるのはこの具象物のようである。この点を考慮してか，P. C. Bayley は，'Don't worry over the allegory, and certainly do not pause to tease out every strand.....Think of him as a narrative poet....., rather than as a moral allegorist.....Re-reading is the time to work at the allegory.....'[5] と述べ，*Faerie Queene* を初めて読む読者に助言を与えている。

---

3) *Ibid.*, p. 485.

4) アレゴリー的解釈を行っているものとして，M. P. Parker の *The Allegory of the Faerie Queene* (Oxford, 1960), John Erskine Hankins の *Source and Meaning in Spenser's Allegory* (Oxford, 1971) は非常に得る所大であった。

5) *The Faerie Queene Book I* (London: Oxford Univ. Press, 1970), p. 28.

また若き Keats は Spenser の作品を耽読し，その形式，内容を模し自ら詩作した。Keats には "*Imitation of Spenser*" という作品があり，Spenser が *Faerie Queene* で用いた Spenserian stanza をそのまま用い，その内容も Spenser 的に自然を描写したものである。又，"*To Charles Cowden Clarke*" には，'Mulla', 'Una', 'Archimago' の名が出ている。感性の強い Keats が Spenser から吸収したものは Allegory における抽象観念よりも，具体的に表現されたもの，つまり具象物，*Faerie Queene* のもつ中世騎士道的世界，それらの雰囲気を生み出している言葉や音の響きであったようである。それはゲーテが抒情詩『歌とかたち』の最後の二行で，「詩人の清らかな手が掬えば水は水晶の玉となる」と表現したものと同質のものと言えよう。Keats と同様読者が初めて *Faerie Queene* を読んだ時の感動は，やはり Freeman が 'the power which enlarges the scale of vision'[6] と言う所の詩の有する能力，我々の想像力を大きく広げてくれる自然描写，その叙情性によって与えられると言えよう。

本論では Book I に現われるさまざまな「光」と「闇」に焦点をあて，その抽象観念の意味と共に具象化された「光」と「闇」の描写，その叙情性について論じてみようと思う。

さて文学において詩人が「光」や「闇」を描写したり扱ったりする場合，その物理的性質だけでなく，象徴的，比喩的意味合いをもたせることが多々見出される。「光」は善，希望，愛，神と結びつけられる一方，「闇」はそれとは対照的に罪，悪，偽として表現されている。太陽の光がなければ農作物は育たず，農耕民は死の危険に晒される。砂漠地方では人間も一生物でしかなく，太陽の光がすべての生物の生命を握っている。海においても，羅針盤のなかった時代では船員の生命を左右するのは，星であり，船員は星の光をたよりに航海をしたのである。このような状況を考えると，「光」というものが神性と結びつき，神の現われとしてとらえられ，宗教性を獲得するに至ったのも当然のことと言えよう。ブルーメンベルク（H. Blumenberg）の言葉を借りるならば，

6) *Edmund Spenser* (London: Longmans, 1962) p. 5.

「光は，あるものに向かう光線，暗闇に道しるべとなる燈火，暗黒を無力化するものであるけれども，同時にまた眼をくらませる光の充満，一切を無規定的に遍在せしめる明るさでもありうる，つまり，みずから現象せずして現象せしめるもの，諸事物の到達しがたい近づきやすさ。光と闇とは，相互に排除しあいつつ，しかも世界の構造を仕上げるところの絶対的・形而上学的な対抗力を表わすことができる。あるいはこうも言えよう，光とは，暗黒の無なることをあらわにする絶対的な存在の力であり，いったん光があらわれたときには暗黒はもはや存在しえない，と。光は押し入るものであり，その充溢において圧倒的な，見渡しがたい明るさを生み，この明るさとともに真なるものが「あらわれ出る」。光は精神の同意を不可抗的に強要する。光は，現にあるがままのものであるが，一方で無限なものをみずからに関与せしめており，損耗することなき浪費である。光は，空間，距離，方位決定，不安なき観照を生み出す。それは求めるところのない贈りもの，力を用いずして強制できる照明である[7]。」と表現することが出来よう。「光」が宗教や哲学だけでなく文学においても無視出来ぬ重要な働き，役割をはたして来ているのも最もなことなのである。*Faerie Queene* もその例外ではない。さまざまな「光」や「闇」，あるいは「陰」が描かれ，しかもそれが *Faerie Queene* の性格を決定するほどの働きをしているのである。物語の筋にそって‘light’という言葉を中心に「光」と「闇」との描写を追ってみることにする[8]。

I 森と光

「光」を考察する場合，「光」の存在と対立するものは「闇」であり，「闇」と対立するものは「光」である。「光」があって「闇」の存在が考えられるのである。従って「光」が語られることは「闇」が語られることである。

7) 『光の形而上学』生松敬三・熊田陽一郎訳（朝日出版社，昭和52年）pp. 23—24.
8) proem の第4スタンザで‘light’が使われているが，これは序歌であるので，本文とは別扱いとする。Book I では‘light’という単語は33回使われている。‘darknesse’は12回，‘darke’が10回，‘darksome’が12回である。なお引用文中の‘light’はすべてイタリック表記にする。

Book I で初めに描かれているのは「闇」である。Vna がその顔をベールでおおって登場してくるのも何か象徴的であり，物語の始まりから dark な雰囲気が感ぜられ，「闇」との関連上このベールはのちに重要な働きをすることになるが，それについてはあとで述べることにする。Redcrosse Knight と Vna の一行が Dragon 退治の旅に出発すると，そのうちに雨が降り出し，激しい嵐となる。嵐を避けるため逃難場所を求めていると，近くに森があり一行はこの森の中へ入って行く。この森は木々がその枝を広げてうっそうと茂っており，その様子を詩人はこう描写している：

Behind her farre away a Dwarfe did lag,
  That lasie seemd in being euer last,
  Or wearied with bearing of her bag
  Of needments at his backe. Thus as they past,
  The day with cloudes was suddeine ouercast,
  And angry *Ioue* an hideous storme of raine
  Did poure into his Lemans lap so fast,
  That euery wight to shrowd it did constrain,
And this faire couple eke to shroud themselues were fain. (st. 6)

Enforst to seeke some couert nigh at hand,
  A shadie groue not far away they spide,
  That promist ayde the tempest to withstand:
  Whose loftie trees yclad with sommers pride,
  Did spred so broad, that heauens *light* did hide,
  Not perceable with power of any starre:
  And all within were pathes and alleies wide,
  With footing worne, and leading inward farre:
Faire harbour that them seemes; so in they entred arre. (st. 7)

この森の prototype として Dante の*Divine Comedy* があげられたり，また木々の描写 (st. 8, 9) が Ovid の影響を受けているようだと言われているが[9]，「光」がほとんど通らない森という描写が与える第一印象は気味の悪さや恐怖感であり，皮膚感さえをも読む者に感じさせる。この森をアレゴリカルなレベルで解釈すると「迷妄」を具象化しており，「光」は神の恵みを表現している。従って「光」がほとんど届かないということは，神の力が必然的に少なくなることである。「光」に対抗する「闇」の支配力がそれだけ大きくなる。この森は当然危険な場所であり，この森に入った Redcrosse Knight と Vna の一行の安全性が脅かされ，何かが起こることが予期される。Vna の忠告を無視して Redcrosse Knight は：

Ah Ladie (said he) shame were to reuoke
The forward footing for an hidden shade:
Vertue giues her selfe *light,* through darkenesse for to wade.
(st. 12)

と述べているが，はたしてどの位 Redcrosse Knight が 'light' の意味を認識しているかいささか疑問である。Vna の忠告は：

Be well aware, quoth then that Ladie milde,
Least suddaine mischiefe ye too rash prouoke:
The danger hid, the place vnknowne and wilde,
Breedes dreadfull doubts: Oft fire is without smoke,
And perill without show: therefore your stroke
Sir knight with-hold, till further triall made. (st. 12)

とある。実際一行は道に迷い，怪獣と戦うはめに陥るのである。「真理」を表

9) see Hankings, pp. 60—61.

わす Vna の言葉を無視した結果である。

怪獣とその子供の様子はこう描かれている：

But full of fire and greedy hardiment,
The youthfull knight could not for ought be staide,
But forth vnto the darksome hole he went,
And looked in : his glistring armor made
A litle glooming *light,* much like a shade,
By which he saw the vgly monster plaine,
Halfe like a serpent horribly displaide,
But th'other halfe did womans shape retaine,
Most lothsom, filthie, foule, and full of vile disdaine. (st. 14)

And as she lay vpon the durtie ground,
Her huge long taile her den all ouerspred,
Yet was in knots and many boughtes vpwound,
Pointed with mortall sting. Of her there bred
A thousand yong ones, which she dayly fed,
Sucking vpon her poisonous dugs, eachone
Of sundry shapes, yet all ill fauored :
Soone as that vncouth *light* vpon them shone,
Into her mouth they crept, and suddain all were gone. (st. 15)

Their dam vpstart, out of her den effraide,
And rushed forth, hurling her hideous taile
About her cursed head, whose folds displaid
Were stretcht now forth at length without entraile.
She lookt about, and seeing one in mayle

Armed to point, sought backe to turne againe;
For *light* she hated as the deadly bale,
Ay wont in desert darknesse to remaine,
Where plaine none might her see, nor she see any plaine. (st. 16)

「光」が当ると，怪獣の子供は親の口の中へ，またたくまに消えてしまう。怪獣の方も子供と同様に，やはり穴へ戻ろうとする。ここに「光」の属性のひとつ，すなわちすべてをあるがままに明らかに照らし出すという性質が見出されるのである。「迷妄」は明らかにされては，その存在が危うくされるのである。しかしながらここで描かれている「光」は Redcrosse Knight が身に付けている武具から出たもので，'.....his glistring armor made／A litle glooming *light,* much like a shade,' (st. 14) と表現されている。陰のようなかすかな「光」であるにもかかわらず，怪獣はたじろぎ穴へ戻ろうとするのである。Redcrosse Knight が身に付けている武具は神学的アレゴリーとして解釈すると，キリスト者が悪と戦うための神の鎧である[10]。神の「光」なのである。従って陰のようにかすかな「光」であっても，怪獣すなわち「迷妄」は避けざるを得ないのである。それにしてもこの描写は自然描写として解釈しても読者の想像力に強くうったえかけてくる描写であると言えよう。

怪獣を倒した一行は旅を続け，やがて夜となる。旅の途中で会った老人 Archimago に騙され，Redcrosse Knight は Vna（真理）を見捨ててしまい，Duessa と旅を続ける。Duessa も光り輝いてはいるが，Canto Ⅷ. st. 49 で述べられているように，それは 'borrowed *light*' である。「真理」を見捨てた Redcrosse Knight は，それを見抜くことが出来ないのである。ここに登場して来た Archimago は抽象観念としては「偽善」を表わしており夜の「闇」に包まれて Redcrosse Knight を騙すのであるが，次の描写をみていただきたい：

10) Douglas Brooks-Davies, *Spenser's Faerie Queene* (Manchester: Manchester Univ. Press, 1977), p. 13 参照。

The drouping Night thus creepeth on them fast,
And the sad humour loading their eye liddes,
As messenger of *Morpheus* on them cast
Sweet slombring deaw, the which to sleepe them biddes.
Vnto their lodgings then his guestes he riddes:
Where when all drownd in deadly sleepe he findes,
He to his study goes, and there amiddes
His Magick bookes and artes of sundry kindes,
He seekes out mighty charmes, to trouble sleepy mindes. (st. 36)

Then choosing out few wordes most horrible,
(Let none them read) thereof did verses frame,
With which and other spelles like terrible,
He bad awake blacke *Plutoes* griesly Dame,
And cursed heauen, and spake reprochfull shame
Of highest God, the Lord of life and *light*;
A bold bad man, that dar'd to call by name
Great *Gorgon,* Prince of darknesse and dead night,
At which *Cocytus* quakes, and *Styx* is put to flight. (st. 37)

ここで述べられている 'the Lord of life and *light*' と 'Prince of darknesse and dead night', という表現は Book I における「光」と「闇」との対立を暗示していると言えよう。それはまた, 'life' と 'dead' との対立関係でもある。この対立関係は Canto XI に至ってその頂点に達することになるのである。

II 木蔭と光

Canto II の st. 1 で 'light' が使われている。引用するとこうである:

.....the stedfast starre,
That was in Ocean waues yet neuer wet,
But firme is fixt, and sendeth *light* from farre
To all, that in the wide deepe wandring arre:

これは言うまでもなく海を行く者にとって道しるべとなる北極星の「光」である。この「光」を見失った者は，ただただ荒海を彷徨う他はない。それはまた「真理」という大きな道しるべである Vna を自ら捨てた Redcrosse Knight そのものなのである。Redcrosse Knight は太陽の「光」を避けるため Duessa と共に木蔭へのがれる。その様子はこう描写されている：

But this good knight soone as he them can spie,
For the coole shade him thither hastly got:
For golden *Phœbus* now ymounted hie,
From fiery wheeles of his faire chariot
Hurled his beame so scorching cruell hot,
That liuing creature mote it not abide;
And his new Lady it endured not.
There they alight, in hope themselues to hide
From the fierce heat, and rest their weary limbs a tide.

(Canto II. st. 29)

「真理」を失った者と「偽り」を具象化している Duessa にとって「光」はこのように容赦無く照りつけるのである。Redcrosse Knight は真偽の判断力を失っているので，その程度に応じて「光」が 'so scorching cruell hot' に感ぜられるのである。それはまた，剣のわずかな「光」にたじろいだ怪獣に比較することも可能である。真なる者は「光」にたじろいたりはしない。真なる者はみずから光り輝く。Redcrosse Knight に見捨てられた Vna も木蔭で休む。

Vna が木蔭へ入る理由は，Redcrosse Knight と Duessa のそれとは異なる。日の光を避けるためではなく，疲れた体を休めるために木蔭へ入ったのである。詩人はこう描写している：

One day nigh wearie of the yrkesome way,
From her vnhastie beast she did alight,
And on the grasse her daintie limbes did lay
In secret shadow, farre from all mens sight:
From her faire head her fillet she vndight,
And laid her stole aside. Her angels face
As the great eye of heauen shyned bright,
And made a sunshine in the shadie place;
Did neuer mortall eye behold such heauenly grace. (Canto III. st. 4)

このように Vna は，木蔭であるにもかかわらず太陽のごとく輝きわたるのである。これは真理の「光」が，「闇」の一部である「木蔭」の支配力を無力にすることを表現していると言えよう。Vna と対照されている Duessa がその力を発揮する場は，Archimago と同様いつも「蔭」あるいは「闇」である。「闇」はその性質上「光」に勝てない，「光」のある場では無力である。Sansioy が Redcrosse Knight に倒されると，Duessa は Night にその助力を求める[11]：

O thou most auncient Grandmother of all,
More old then *Ioue,* whom thou at first didst breede,
Or that great house of Gods cælestiall,
Which wast begot in *Dæmogorgons* hall,
And sawst the secrets of the world vnmade,

11) この夜の描写はよく引用されて来た個所であり，半擬人法の見本のような描写と言えよう。

Why suffredst thou thy Nephewes deare to fall
With Elfin sword, most shamefully betrade?
Lo where the stout *Sansioy* doth sleepe in deadly shade.

(Canto V. st. 22)

And him before, I saw wilh bitter eyes
The bold *Sansfoy* shrinke vnderneath his speare;
And now the pray of fowles in field he lyes,
Nor wayld of friends, nor laid on groning beare,
That whylome was to me too dearely deare.
O what of Gods then boots it to be borne,
If old *Aveugles* sonnes so euill heare?
Or who shall not great *Nightes* children scorne,
When two of three her Nephews are so fowle forlorne. (st. 23)

Vp then, vp dreary Dame, of darknesse Queene,
Go gather vp the reliques of thy race,
Or else goe them auenge, and let be seene,
That dreaded *Night* in brightest day hath place,
And can the children of faire *light* deface.
Her feeling speeches some compassion moued
In hart, and chaunge in that great mothers face:
Yet pittie in her hart was neuer proued
Till then: for euermore she hated, neuer loued. (st. 24)

Night は 'of darknesse Queene' と表現されており，また 'great *Nightes* children', 'the children of faire *light*' という表現も見られる。ここに我々は light と darkness との対抗を Duessa の言葉から明確に知ることが出来る

のである。この敵対関係は偽りの光で装っている Duessa を見て，引き帰そうとする Night からもうかがい知ることが出来よう。

さて Sansioy との戦いで疲れた Redcrosse Knight が休む場所は，湖のほとりの「木蔭」なのである：

Ere long she fownd, whereas he wearie sate,
To rest him selfe, foreby a fountaine side,
Disarmed all of yron-coted Plate,
And by his side his steed the grassy forage ate.

(Canto VII. st. 2)

He feedes vpon the cooling shade, and bayes
His sweatie forehead in the breathing wind,
Which through the trembling leaues full gently playes
Wherein the cherefull birds of sundry kind
Do chaunt sweet musick, to delight his mind: (st. 3)

Redcrosse Knight は「木蔭」で，「悪」と戦うためのキリスト者の武具を脱いでしまうのである。「真理」を捨てた者にはキリスト者の武具はもはや必要でなくなる。これは，身も心も完全に無防備な状態になったことを意味する。従って，Redcrosse Knight にはもはや「悪」と戦うだけの力はない。いともたやすく Orgoglio の手に落ち，暗黒の「闇」の中へ幽閉されてしまうのである。これは「真理」と「信仰」を失った時の状態を表わしている。「闇」に支配されてしまったのであるから，Redcrosse Knight を救い出すためには「闇」と対抗出来るもの，すなわち「光」が必要となる。この Redcrosse Knight を救うのが Prince Arthur である。Arthur は燦然と光り輝いている：

His glitterand armour shined farre away,

Like glauncing *light* of *Phœbus* brightest ray;
From top to toe no place appeared bare,
That deadly dint of steele endanger may:
Athwart his brest a bauldrick braue he ware,
That shynd, like twinkling stars, with stons most pretious rare.
(Canto VII. st. 29)

And in the midst thereof one pretious stone
Of wondrous worth, and eke of wondrous mights,
Shapt like a Ladies head, exceeding shone,
Like *Hesperus* emonst the lesser *lights*, (st. 30)

His haughtie helmet, horrid all with gold,
Both glorious brightnesse, and great terrour bred; (st. 31)

「光」に包まれている Arthur とは対照的に Redcrosse Knight は「闇」の中で次のようにうめき声を上る：

O who is that, which brings me happy choyce
Of death, that here lye dying euery stound,
Yet liue perforce in balefull darkenesse bound?
For now three Moones haue changed thrice their hew,
And haue beene thrice hid vnderneath the ground,
Since I the heauens chearefull face did vew,
O welcome thou, that doest of death bring tydings trew.
(Canto VIII. st. 38)

Redcresse Knight はこともあろうに死を望むのである，いまや完全に「闇」

に支配されている。「光」の子 'the children of faire *light*' (Canto V. st. 24) である Arthur は「闇」の子 'great Nightes children' (Canto V. st. 23) を倒し，Redcrosse Knight を救い出すのである。

しかしながら Redcrosse Knight はさらに「闇」に属する Despaire の挑戦を受けることになる。Despaire の住み処はこう描かれている：

Ere long they come, where that same wicked wight
His dwelling has, low in an hollow caue,
Farre vnderneath a craggie clift ypight,
Darke, dolefull, drearie, like a greedie graue,
That still for carrion carcases doth craue:
On top whereof aye dwelt the ghastly Owle,
Shrieking his balefull note, which euer draue
Farre from that haunt all other chearefull fowle;
Anc all about it wandring ghostes did waile and howle.

(Canto IX. st. 33)

Despaire も「悪」すなわち「闇」の子と考えられるわけであるから，必然的に暗い所に住んでいるのである。st. 35 では 'That darksome caue' と述べられている。Vna を見捨て，Duessa を選び，悪の手に落ちたこと，つまり Sin を犯した者は精神的どん底に落ちる。その行きつく所は「絶望」しかない。ここでの Despaire の登場には説得力があると言える。絶望した者に残された手段は，自らその命を絶つことである。Redcrosse Knight もその例外ではない。Despaire から渡された剣で自らの胸を突こうする。それを止めたのは Vna である。Vna は Redcrosse Knight に向かって次のように述べる：

Fie, fie, faint harted knight,
What meanest thou by this reprochfull strife?

Is this the battell, which thou vauntst to fight
With that fire-mouthed Dragon, horrible and bright? (st. 52)

Come, come away, fraile, feeble, fleshly wight,
Ne let vaine words bewitch thy manly hart,
Ne diuelish thoughts dismay thy constant spright.
In heauenly mercies hast thou not a part?
Why shouldst thou then despeire, that chosen art?
Where iustice growes, there grows eke greater grace,
The which doth quench the brond of hellish smart,
And that accurst hand-writing doth deface.
Arise, Sir knight arise, and leaue this cursed place. (st. 53)

「真理」を表わす Vna の言葉に，罪深き人間に対する神の愛が示されていると言えよう。

しかしながら Redcrosse Knight は犯した罪を清めなければならない。Vna は Redcrosse Knight を 'house of Holinesse' へ案内するのである。この館にはさまざまな抽象観念が，そのまま抽象名詞として登場してくる：'Patience', 'Amendment', 'Penance', 'Remorse', 'Repentance'。これは罪深き人間が神の愛にめざめ，改心するまでの心理的過程を表わしていると言えよう。このようにして身も心も清められた Redcrosse Knight は Dragon 退治へ向かうことになるのである。

III 闇と光の戦い

Spenser は Dragon の様子を8連にも渡って描写している (st. 8–15)。まづ Dragon の生み出す「影」に注目してみたい：

By this the dreadfull Beast drew nigh to hand,

Halfe flying, and halfe footing in his hast,
That with his largenesse measured much land,
And made wide shadow vnder his huge wast;
As mountaine doth the valley ouercast.
Approching nigh, he reared high afore
His body monstrous, horrible, and vast,
Which to increase his wondrous greatnesse more,
Was swolne with wrath, and poyson, and with bloudy gore.

(Canto XI. st. 8)

Dragon はこのように「影」をつくる。しかもそれは単なる shadow ではなく，'wide shadow' と表現されている。つまり，これまで見て来た「木蔭」と同様，「影」は「悪」への「誘惑」と解釈出来る。あるいは「悪」が行なわれ易い場所と言える。従って「悪」を体現している Dragon が生み出す「影」は，必然的に 'wide shadow' となるのである。次に Dragon の口が描写されている：

his deepe deuouring iawes
Wide gaped, like the griesly mouth of hell,
Through which into his darke abisse all rauin fell. (st. 12)

これは Dragon の作る「影」すなわち悪の誘惑に負けると，Dragon にのみ込まれてしまうことを表現している。つまり「闇」の世界に支配されてしまうのである。これらの8連に渡る Dragon 描写は，「影」から「闇」への移行を表現したものであり，人間が「悪」の誘惑に負けるとその結果として「地獄」へ落ちることを述べたものである。

さて，いよいよ Redcrosse Knight と Dragon との戦いが始まる。第一日目の戦いでは Redcrosse Knight は Dragon の尾によって地に叩き付けられ

てしまう。「光」の子である Redcrosse Knight が苦戦をしているわけであるから，当然「闇」の支配力が強くなる。日も暮れ，文字通り「闇」すなわち「夜」となるのである。これはいわゆる micro cosmos (=Redcrosse Knight) と macro cosmos (=the golden *Phœbus*) との一致と考えることが出来る。詩人はそのさまをこう描写している：

Now gan the golden *Phœbus* for to steepe
His fierie face in billowes of the west,
And his faint steedes watred in Ocean deepe,
Whiles from their iournall labours they did rest,
When that infernall Monster, hauing kest
His wearie foe into that liuing well,
Can high aduance his broad discoloured brest,
Aboue his wonted pitch, with countenance fell,
And clapt his yron wings, as victor he did dwell. (Canto XI. st. 31)

この戦いは三日間続くことになるのであるが，Redcrosse Knight が苦境に追い込まれると同時に夜となり，体力を回復して蘇ると同時に日の出となる。Redcrosse Knight は「光」を代表しており，Dragon は「闇」を体現していると解釈するならば，この三日間の戦いは「光」と「闇」との戦いと言うことが出来るのである。もちろん，このまま第一日目で Dragon が勝てば「悪」あるいは「闇」の勝利となってしまう。この一時の「闇」の勝利は Redcrosse Knight にとって体力を回復させるための期間となる。Redcrosse Knight は夜が支配する中で，'The well of life'（命の泉）によって救われるのである[12]。それは次のように描写されている：

It fortuned (as faire it then befell)

12) see Shaheen's *Biblical References in the Faerie Queene*, p. 96.

Behind his backe vnweeting, where he stood,
Of auncient time there was a springing well,
From which fast trickled forth a siluer flood,
Full of great vertues, and for med'cine good.
Whylome, before that cursed Dragon got
That happie land, and all with innocent blood
Defyld those sacred waues, it rightly hot
The well of life, ne yet his vertues had forgot. (st. 29)

'The well of life' のおかげでいまや Redcrosse Knight は 'new-borne Knight' (st. 34.) となる。第二日目の戦いが始まるが，またしても Redcrosse Knight は Dragon の吐く火で後退し倒れてしまうのである。この二日目の戦いでも苦境に立たされると同時に夜となり，蘇りと共に夜明けとなるのである。Redcrosse Knight を救ってくれたのは 'The tree of life' であった[13]。詩人はこう描写している：

There grew a goodly tree him faire beside,
Loaden with fruit and apples rosie red,
As they in pure vermilion had beene dide,
Whereof great vertues ouer all were red:
For happie life to all, which thereon fed,
And life eke euerlasting did befall:
Great God it planted in that blessed sted
With his almightie hand, and did it call
The tree of life, the crime of our first fathers fall. (st. 46)

「闇」の一時の勝利と共に，やはり日が暮れ始めることになる：

13) *Ibid.*, pp. 96—97.

By this the drouping day-*light* gan to fade,
And yeeld his roome to sad succeeding night,
Who with her sable mantle gan to shade
The face of earth, and wayes of liuing wight,
And high her burning torch set vp in heauen bright. (st. 49)

'drouping day-*light*' はまた 'drouping' Redcrosse Knight でもある。Dragon と Redcrosse Knight との戦いに，night と day,「闇」と「光」が完全に呼応しているのである。やがて朝となり，キリストの復活と同様に三日目に Redcrosse Knight は起き上り Dragon を倒す。ついに「光」は「闇」に勝ったのである。

以上「光」と「闇」という観点から Book I を素描して来たわけであるが，Book I にはさまざまな副筋や出来事があちこちに現われては消える。魔女，怪獣，巨人，妖精，異教徒等が現われて戦いが繰り広げられる。ギリシア・ローマ神話，聖書，中世文学の影響がいたる所に見出され，それらが Spenser 流に変形されており，しかもアレゴリーという文学形式によって詩語や文体とあいまって，きわめて複雑な詩文に組み立てられているのである。しかしながら Book I を解釈する上において，複雑な中にも大小さまざまな「光」と「闇」との戦いという大きな潮流が Book I を貫いて流れており，それが Book I の性格を決定する上で大きな因子のひとつとなっていることはまちがいないようである。

参 考 文 献

Bayley, P. C. *The Faerie Queene Book I*. London: Oxford Univ. Press, 1970.
Brooks-Davies, Douglas. *Spenser's Faerie Queene*. Manchester: Manchester Univ. Press, 1977.
ブルーメンベルク，H.『光の形而上学』（生松敬三・熊田陽一郎訳）朝日出版社，1978.

Freeman, Rosemary. *Edmund Spenser*. London : Longmans, 1962.

Garrod, H. W. *Keats : Poetical Works*. London : Oxford Univ. Press, 1978.

Hankins, John Erskine. *Source and Meaning in Spenser's Allegory*. London : Oxford Univ. Press, 1971.

MacCaffrey, Isabel G. *Spenser's Allegory : The Anatomy of Imagination*. Princeton : Princeton Univ. Press, 1976.

Parker, M. P. *The Allegory of the Faerie Queene*. London : Oxford Univ. Press, 1960.

Shaheen, Naseed. *Biblical References in the Faerie Queene*. Memphis : Memphis State Univ. Press, 1976.

Smith, J. C. (ed.) *Faerie Queene*. London : Oxford Univ. Press, 1909.